夏

栗本青蕉發句集

秋之部

秋

ぬけてゝ芋の葉の光や秋の秋

松に蟬嘯て秋ゝ絞りもく

あなゝ秋風きちぬ牛蛙人

茅乃戸の月や今殺と蚊の秋

秋寺の人ゝ人ゝ仏中乃唐

蛍蚊ゝ神に合ぬ今殺の秋

夜痩に蚊しゝゝるゝけさに秋

笠附は立秋の日の秋立庭の中
太用より孫兵衛へ今朝は秋

七夕

たなぬ世はをあを星乃逢夜八
系の戸乃年法ワ乃や蔭の反
海士うるの乾ゑ神を引逆へ
曉の篠引蔦もり天の川
雲掃をん風よ星のおれの車

魂祭

娘しやうを世の人は魂祭り

ほし合乃うらひしはよ魂ゆり
なを間のおれをろ引魂祭

野分

芭蕉葬の墨ふゑ朱よ坊ら居
炭角をふゑかゝ駒の印分う車

相撲

毎就ふ見送れをり角力元
勝角力を咲へき男う車

秋風

あせ風は黄ふゑ初をり秋の風

一ぱう萩くれなゐの秋の色
胡麻を家かちよなりぬ秋の風

稲妻

いかばよの世うの穂よ通よ田面小
稲妻や今ぞ世うの表は蕎紅葉

蓼

見乃乃や蓼の一本茎の蓼
大粒ゝ蓼蓼ゝ一本は胡

蓼

鮒魚や清きかまりをはたおはは

蓼や横日きしよ茶は上
梅乃枝蓼の茶は一輪を
あいよ夜の鮒魚乃茶はきり

蘭

茶は茶も雨を破るか仏きり
らふの香やとろゝ初る日乃燈り
蘭の茶や色なれ寒は茶ゝ
らよは香や茶醤の面打きり
茶乃茶を落立は月の匂ひ

女郎花　蕃椒

雲うすむ秋より遠きうす女郎花
兵は矢先より似うす唐かし

秋蝶　秋蚊

秋の蝶いうかはるを秋の蚊
さらさらと羽より日のさしや秋の蝶
秋風よ白蝶果を狙ひきり
秋乃蚊やたのれはすと立もるく

虫

むしは言やはほれを聞て萩の上
秋夏は化してやあのなりくに

虫の言にわくくつ虫あしす
吟とかく年より遠きりきりに
棚ちやあるもあに蟋　蟀
忘想乃蘇芳秋けんなりくに
松虫しよりよみ人乃神より高き乃

萩

吹かる中海く萩はなりう角
蓼ちちちと絵紙ふ添ん家の萩
さらく萩やいさひらるを蓼初乃

月

月とまれ中よ今をはけしたぶ
赤門を踏出よりきよの月
ぶんぶんと春の手鞠を離れう
苔なとちる今春の月はうらん
名月や地ゐ引碧海大の川
名月やこの八枝中乃全ぶ
名月や松よかれい松流　茶
名月やぬくるふけけく法之戸
迷よ尤し人なぬく夜えの軍
年とりそ四隅ゐ八原月えぶ

松風は春ふんたりう新乃月
青空のうなきそ数深月えぶ
雑子よ月はうの菜苔う軍
癖ゐ多ゐ雑れぬ月は枝代

天明ゐ年よは原とくとと
已午五つ六つ来のまよ知れるこ原面
はいくきんゐ人のきゐを弱る
穀を見うるよ実をむまよ色うく
きこそ神はる及一原もいと薄代く
久月の原えは恵そ夜夕ゐ不秋昇
て清小月えは枝きゐ原ゐ田毎の之数
まみのてをめてきなけーーなよ
ゐそこ云的流泌原ゐ東園洪筍愚きゐ
いこゐ原ゐと和よはこてあ時井ーの
あれのゐーこ年月乃かけと原ゐう

[illegible]

稲妻の洲ゝを今宵月の雪

十六夜や周りとられて茶碗哉

いさよひやそこ〳〵ハ如庵柿は渋

既望ゝ蔦かくれよる葉乃色

ゆさよひや芭蕉はしい皆月　夜

長まつ月やあ[illegible]の夜は庭

往而

秋は而月ゝ[illegible]て行出し

往而や一羽鶴乃帰ル[illegible]

砧

[illegible]風[illegible]

[illegible]と人やゆらん小夜[illegible]

蕎麦花

世[illegible]の銀河のやゝ[illegible]

月を[illegible]むもひやそ[illegible]の巷

鶉

青秋と極る夏[illegible]や丁は[illegible]

羽[illegible]ゝ少[illegible]月の丁

いく[illegible]

杜鵑花の咲かりしかへ
業は植やひとかはかりしかへ

蟋蟀

蟋蟀声高枕乃星ふさゆるなり
蟋蟀ふるや戸を吹ける蟋蟀の声
町中へとれくもぬ意出蟋
角乃ふり時雨の月や蟋蟀声
漏やちるよ雪時の蟋乃声
はらけくとを渡し点ある郭の蟋

菊

三日月よりひとしくの蒼弓
慣きまくに菊に慈ある隣の車
西は菓かられるとなけしき式

市中冥居吟

菓の匂も市乃角さて中下地宗

後月

時ハまち点の雲やほの夜
後の月蔦麦よはもの乃も所ね

尾張

秋の月やうたれあのむ尾宗

既うかれたる口と秋ぬる尾花うの華

鶏頭

鶏冠の美なる花も時をはるる秋

鶏頭や倒海日を見ぬうし

秋は暮

戸口より人影たしぬ秋の暮

垣よりも高く成もうこの秋乃暮

秋の暮陸地をうきひしをと

かうむれい海中海中社の暮

秋のくれ社の茶社奥と人毎

雜秋

中くに小自身を入日の秋乃山

むとそれし爰ちに成る秋を

秋風をあやかに拍つ赤とんか

分よりも秋を家が小萩うれ

引ちもなくやうるの盛哉、柔

蔦栗や墅乃命も山の奥

紅葉

水ちりや法ん岸のそそ和葉

ちちり門よりおを玉身のをみちうれ

岩山

山も川も岩もあしの紅葉哉

暮秋

秋の月ゐつまでさけぶちどり

川上あしを枯ぬるに名残の哀

せまり行秋や豆ふく国の古

行秋や雲はあれよあるなし

風さえて小春さく咲よ秋くれぬ

冬之部

時雨

井裏舎

初しぐれ自立井よ吹かれ

簑ぬ孔ふく時雨や初しぐれ

梅嫌小粒よ赤し初達れ

しぐれきりあく風芋かし強

二枝之梅見こりつ河面の雨

仙原中小春の炭を折り小枝時雨

芭蕉忘

瓶に蕨を入れ小枝しられ
あらしは浦よ神くさを忘れとをとをとをとをとをとをとをとを行て
清流らうけもまもりの月も照
夏草に芭蕉葉と
人
翁の笑顔のしれい深よろく
菜花
系のもかやあるも人のえぬかとう
ちやの花のうしろも似よりつ山
麦苅　蔦まき刈

苅けし枝らう移りの麦の麦
枯はうらやよされし神もかりく
大根引
雪芋や園の月枝よ大根引
忠度の腕ふれ人と大根引
枯野
二月月の先蕨代　枯蕨代
茶の木ふく麦よりけく枯蕨代
木のうしろ
木のうしや三条吹原園枯麦

吉と僧侶は頭巾を被り面白し

氷

氷枕や夢よりあるる上草庵
松風のこゑがはりて蚊の多
かちなかなる果を添へ枕もり式

千鳥

冴うる夜高く星うさよふけ
かくふとも廿七枕は月乃海
あ事月や風の花うよ嘶ちとう
れ冊ふる吹る枕書ゆ嘶ちとう

水鳥

多多やのこうたち鳥人は鳥
れ冊花明よ月さ夜鷺乃うれ森式

什鶏

被まくはく帰きうみそちゆね
莫奈奈奈奈れうれうねうれ鶏
捨石のうけく花うみそさね

生海嵐

若しをそれて動く生活嵐式
うれ人のゆ一居よ仰しか海こう軍

霰

神しくやゑまひくの芦北なふ小
焼火のもりて氷はしも夜の音
ちく霙よ赤えさしきり霰の飢

炭竈

きくいはや焼人こえて狩をし
炭竈や立けよりり夕煙り

埋火

埋火に松風落は鶴き代
埋火や枕の替もあらまれ

埋火やいく夜のあふる鼻はしら
ぶの若すゑ素とうみはかれ
墨はしく見し身をとなれ

火鉢　火桶

長明の記よかせきのちつくるれ紙
うちぬくも世をよたた近江の原に庭としる
あるい埋火をかくれ木たして炭乃藤
覚えとなとん

うみ晴れに履かきらへん大鉢代
桐火桶露うくみしれのおに跡あり

鉢叩

ふ穀ら細き世や弱人鉢叩
鉢まとき亡乃力の何里とけんを

冬ごもり

寺院いやせを宮仕菜ものの艶
冬籠菜はく言を幕へ
冬籠秋をうり乃病時を忘し

雪

初雪や実を降の二度藪柑子
えハくと降よ言あり秋の雪
雪の豆ふるもはをかけしなし
面白や他をうへハ禍乃雪
雪の秋世はをれくよ海旬

雪の人ふぬ世はなの風情の命
ふ海岸より奴ふ句る秋乃雪
別荘や脚はかよも秋はを
あく居を足雪かを除雪ハ
大雪の秋と打岩ハ累色の命

寒く念佛

はをふを浮声をうく寒く念佛
川筋やふ家かハ永寒念佛

寒く月

烏花く言蜜柳の寒はの月

蒙海[illegible]人魚落もり言の葉

雜あて

園は麦系の末もたを賜ふ八

蛇[illegible]やはあり[illegible]一毋の新

興蓋葉苗[illegible]新[illegible]の系

爲雪よ耳[illegible]やはいん　梅　塚

今[illegible]海[illegible]雪[illegible]の軍

山茶花や在新[illegible]茶は中

曉乃[illegible]氷らん細代も

初雪の[illegible]地把は

年忘

夏は世の夏とえ[illegible]や年忘

[illegible]れ忘[illegible]者[illegible]の軍

[illegible]よ似[illegible]時や[illegible]れ

果[illegible]

[illegible]事[illegible]ら[illegible]く[illegible]田は[illegible]

[illegible]や[illegible]るとも[illegible]れ牛は[illegible]

[illegible]く[illegible]やても[illegible]の[illegible]乃[illegible]

世の[illegible]は[illegible]の[illegible]

[illegible]海の[illegible]

年の帝ふかきまれ出たる峰の俤
なりしまを枝ふりみえ川辛崎梅
ふる雪あれ仮の海も辛乃波
かくれても立たるあらしれうも
又れたる
年しやまの梯はあらしふ
白しらゆきやこん風除の梅
雲は悲しれ秋風の楽は寂しく
風しるの書よ海の乃曲とやはる
藝しを見はるかきれし人の年と
うらふふしをとるものを指ふ
逢坂の関ふりゆして自うふ海を
春をしるかるる
杜冊しる海う松風吹けよ除夜の園